

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

点数化できるものは、多岐にわたります。

たとえば勉強も運動もコミュニケーション能力も生活態度も、体力だつて友達の数だつてサークルの役職だつて、そうしようと思えば親の経済力さえも点数化して加えることが可能です。結果をパソコン上で瞬時に一覧にして、順位が上の者から並べることも不可能ではありません。頻繁に新しい情報に書き添えていけば、製品、いえ、人間の管理が可能です。成人期以降はメディアに出た回数も加えるといいでしょう。同僚からの評価も、語学力も、J・K・Lのフォロワー数も、釣りの成果さえ得点化できるのです。

「あと何を加えれば、わが社に必要な人材が獲得できるだろうか？」

「わが社では、このレベルの人材があと何人必要だ」

「この能力を集中的に研修で強化しよう」

「病歴もメンタルの強さも書き込んでおかなければいけない。これから何年間、健康で働けるかは重要な情報だ」

このような具合に、工夫して活用すれば、会社の業績はアップ間違いなしです。

これはフィクションでしょうか？

いいえ、すでに多かれ少なかれ、私たちはこういった視点で人を比較し、評価する社会の中で生きています。

（中略）

子どもたちは友達同士で競争させられ、テストの点数で順に並べられ、点数がつけられた学校に点数の順で入り、卒業のときにも次に入る学校で並べられ、最後は就職で優劣がつけられます。就職した会社では業績順に並べられ、売上高、給料、出世と評価され続けます。

実は、競争や比較は生まれたときから始まっているのです。

（中略）

競争は子どもを幸せにするか？

「競争させれば子どもたちは伸びる」という考え方があります。他者よりどれだけよい点を取るか、他者よりどれだけ拔き出るかが大切で、他者に勝つことが幸せにつながると子どもたちを信じさせ、比較してみせ、子どもを競争に追い込んでいます。

しかし、この考え方は幸せをもたらすでしょうか。

競争というやり方が妥当かどうかを、日本の民話『ざるかに合戦』で考えてみましょう。この寓話は、ずる賢いサルによって親を殺されたカニが、親の敵をとるストーリーです。サルに比べて体の小さなカニは、「一人」では到底サルに太刀打ちできません。そこで、栗、臼、蜂、牛糞といったさまざまなタイプの仲間の力を借りてサルをやっつけます。

現在の日本の教育は、このカニ、栗、臼、蜂、牛糞といった個性的なメンバーに、一律に、国語や算数、英語を教えて仲間うちで競争させているかのようです。この「五人」を比較して並べてどうしようというのでしょうか。

（中略）

カニ、栗、臼、蜂、牛糞のように、人はもともとそれぞれの個性を持っています。民話の中では、それぞれがそれぞれの力を発揮して敵討ちします。そもそもコミュニケーションというのは、多様な人たちがまぜこぜになること、それぞれができることを持ち寄ることで活性化するのです。

（武田信子『やりすぎ教育 商品化する子どもたち』ポプラ社より、一部改）

問 筆者は「人間に点数をつけ、競争させる社会」について問いかけています。本文の内容を踏まえ、このことについて、あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。